The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 連歌と「挨拶」：当座性のありか |
| Author(s) | 浅井，美峰 |
| Citation | 語文．2024，122，p．40-50 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/98209 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 連歌と「挨拶」

## ――当座性のありか――

浅井美峰

### はじめに

連歌は五七五の長句と七七の短句を複数の連衆（連歌会参加者）が順に連ねていく文芸である。

「連歌」というものの性格について、田中裕氏は二条良基の連歌論から、連歌における当座性（一座における制作と享受）・興遊性（当座の面白さ）・聴覚性（詠吟）が文芸性に結びつくと論じ[1]、島津忠夫氏は連歌の持つ、興行を前提とする芸能的性格と詩としての文芸性について考察している[2]。文芸として連歌作品を扱うだけではなく、連歌の性格について、複数人が集まって当座で詠まれるという形式と、その連歌・連歌会が祈願や追悼など目的を持って行われるという内容の両方を重視している。

島津氏[3]が「連歌の一座では、ごくありきたりの表現の奥に、後にはわからなくなってしまう、当座性が詠み込まれることが多い」とするように、連歌作品の享受について考える際にも、その「当座性」によって、文学作品として例えば和歌と同じように読解・鑑賞できるかという点が問題となる。連歌会の当座において意味を持った表現は、後から読まれる場合には効果を発揮しない・理解されないこともある。これは、句集等に句が切り出された場合に当座の情報が剥落してしまう（詞書や注釈で補える場合もある）のはもちろんであるが、百韻・千句の形で残っていても当座の人々と同じ視点で句全体を理解できるわけではない、ということである。その座の中での人間関係、出句時の座の雰囲気、当時の流行、局所的な知識体系、当座の興など、存在は想定でき、句の内容や連歌会張行に関する情報から推測できる場合もあるが、基本的にこのような情報は連歌作品の中に見出だすのが困難である。

このような「当座性」の具体例の一つとして、「挨拶（性）」が挙げられる。『俳文学大辞典』の「挨拶」の項[4]では、「相手に対する親和の意を込めて句を詠むこと」、「挨拶性は古典から現代に至

る俳文芸の基本的性格といってよい」とする。山本健吉「挨拶と滑稽」[5]をはじめとして、俳諧・俳句における挨拶について論じる場合に、そこから遡って連歌における同様の意識について、連歌論や連歌の発句を引いて説明される。しかし、連歌における「挨拶」について、既にそこに挨拶の意識があることを前提とした言及となっているものも多い。連歌研究においても、先述したように連歌の持つ性格の一つとして当座性（挨拶性）が挙げられるものの、その具体的な在り方や表現については明らかになっているとは言えない。連歌の性格・本質に関わる当座性の問題として、連歌における「挨拶」について、どのようなものだったのかを考えていきたい。

## 一、連歌の当座性と「挨拶」

連歌における「挨拶」についてはこれまで、特に発句・脇句（第一句目・第二句目）を中心に論じられてきた。

発句は、二条良基の連歌論書『僻連抄』[6]（康永二〇（一三四五）年）で「発句は最も大事の物也」とされるように、連歌の中で重要視されるものであった。座の中で最も身分の高い者、客人が詠むことが多く、座の主人（亭主）・一座の人々への挨拶を込めて詠まれ、その百韻の最初を飾り基調となるものである。

同じく『僻連抄』で「一座を張行せむと思はば、まづ時分を選び、眺望を尋ぬべし」と連歌会の場の重要な要素として時分・眺望を挙げ、連歌会を行うに相応しく調えることを説いている。良い時分・良い眺望の場を選べば自ずと連歌も良いものとなる、ということで、発句にその連歌会が行われる当季の句を詠む、ということとも関わる。この問題については、廣木一人氏[7]が、

連歌の発句における「当季」と一般に考えられているものが、実は「十二月題」というべきものであり、場合によっては、それさえも細分化した「折節の景物」であったということ、それが本意という形で、当座性を保証したものであったことを述べてきた。

としている。発句に当季（その折節の景物）を詠むということが、当座において意味を持つ、ということである。

発句における当座性について、松本麻子氏は[8]、

連歌の発句に挨拶の意味合いがあると考えると、他者を喜ばせるために発句のみを送る（贈る）行為もまた挨拶であると言える。発句は、最初は遠方の人への、または連歌に同席が叶わなかった相手への挨拶として詠まれたことにより、次第に付句を必要とせず独立するようになったのだろう。

と、発句が単独で独立して詠作されても、その発句の持つ挨拶性は保持されていることを述べている。

このような発句の持つ挨拶性に対し、脇句についても「挨拶」ということが言われる。「客発句脇亭主」という言葉もあるが[9]、通常、一座の主人・亭主が脇句を詠む。つまり、発句での客人からの挨拶に、亭主として挨拶を返す形である。句の内容や表現についても「いづれも発句によるべし」（僻連抄）と、発句に合わせた

形で付けることが求められる。

和歌の贈答や二句の短連歌であれば、そこでやりとりは完結するが、百韻等の定数連歌では発句に対する挨拶、社交辞令に終始するのではなく、そこから第三句以降の句を続け、連歌を展開させていくことが必要となる。発句と脇句の間の「挨拶」は客人・亭主間だけのものではなく、一座の人々全員にとっても重要な儀礼であり、そこから全員の共同により百句を繋げてはじめて一つの作品となるのである。[10]

また、岸田依子氏は、「連歌の〈座〉と百韻の様式には、神々とともに時空を共有する祭祀性や法楽的な要素が内包され」ているとし、発句で神を迎え、脇句で神への挨拶をし、挙句で祝言によって神送りをする形で、連歌の〈座〉と神が結びつく、とする。座中の人々同士だけではない形の「挨拶」が存在する、ということである。

このように連歌における「挨拶」は、主に発句・脇句に見られる、当座での社交的儀礼とそれへの返礼、句の表現や内容の応答、神等を含めた他者へ向けられる意識について論じられてきた。しかし、これらは別種の事象であるにもかかわらず、同じ「挨拶」という言葉を用いているために問題が複雑化している。

「当座で他者へ意識を向け、それを連歌の句上で表現すること」を本稿では「挨拶」とし、範囲を最大限幅広く取って、連歌における「挨拶」がどのような方法で行われるものだったのか、また、それが座を離れた段階でどの程度、情報として維持されるものだったのか、について考えていきたい。

## 二、亭主への挨拶の表現―当地・当座のものを詠む

本節では、発句の挨拶性を持つ表現について、再度作品に即して考える。

まずは、亭主に対しての「挨拶」を担う発句の表現について見ていく。連歌師が旅先で連歌会に参加した際の発句・人から所望されて詠んだ発句が句集や紀行文の中に残されている。句に詠む素材の選択と表現に注目する。

宗祇の句集『愚句老葉』[11]では、次のような詞書と自注が句に付されている。

神保宗右衛門尉許にて、扇を
心あひの風の名におふ扇かな

「あひの風」、北国に吹く也。「あゆの風」ともいふ。扇の風、又心のまゝなるを思ひ合て申也。

上杉戸部亭の月次に
咲く藤に匂ふや北の家の風

上杉は北家藤氏也。是を褒めて、しかも北国にての発句なれば、か様に申し侍り。

詞書から前者は越中を拠点とした神保長誠のもとでの発句、後者は越後の上杉房定の月次連歌での発句であることが分かる。[12]

さらに、自注を見ると、両句ともその土地（北国）に関わる「あ

ひの風」「北」を詠み込む。この扇の風はまさに心のまま吹く北国の風だ、とする前者も、藤の花に匂うのはこの北国に吹く藤原北家（上杉家）の風だ、とする後者も、その地とそこを治める亭主の繁栄を言祝ぐ発句である。亭主への挨拶の心が句の内容・表現と密接に関係している。

しかし、宗祇の死後に発句を集成した『自然斎発句』ではそれぞれ「扇」「藤」の句群に収められ、詞書・自注に見られた座の情報は削ぎ落とされている。誰のところでどのような意図を持って詠まれた挨拶句か、という情報は、宗祇の発句を鑑賞する際には不要で、「宗祇の扇／藤の句」という情報が必要とされている。実作の模範としても、神保氏・上杉氏のもとで発句を詠むために見るものではなく、扇や藤という句材の詠み方の参考としての側面が重要視される。

宗祇の門弟宗長の『東路のつと』[13]では、

この八島より日光山へ、おのおのうちつれ、苅沼といふ所に、綱房の父筑後守綱重の館あり。一宿して懇ろのいたはり、筆にも尽しがたし。その朝、日光山へあひ伴はんとて出立の急ぎの間に、

若えつつ黒髪山ぞ秋の霜

所望はなかりしかど、あまりに志の謝しがたきばかりなり。黒髪山の麓なればなり。綱重の子、孫、類ひろく栄えたることなるべし。

と、出立の際に発句を詠んで歓待への謝意を表している。これは連歌会で詠まれた発句ではないが、当地日光・苅沼（鹿沼）の黒髪山（男体山）が若やぎ栄える様子に、手厚くもてなしてくれた壬生綱重の一族の繁栄を重ね、当季の秋の霜も詠み込んでいる。

「所望はなかりしかど」と説明しているのは、旅先で発句を所望された際にもこのようなその土地の景物を詠み込んだ発句を相手への挨拶として贈っているためであろう。「若えつつ」の句は、もちろんこのまま連歌の発句として百韻を続けることが可能であるし、壬生氏が珍重したことは想像に難くない。

このような挨拶の在り方は、「その土地のもの」という区分からさらに細かく「当座・亭主に関わるもの」という形となって表れてくる。宗長の弟子の連歌師宗牧の『東国紀行』[14]には、

心やすく両日遊覧して、

花かともいふまで雪の籬かな

柴垣、新しくしわたして、なにとがな思へる気色を謝したる様なり。

のように、深溝松平氏（好景か）のもとで歓待を受け、そこで連歌会の発句を詠んだものと見えるが、新調された柴垣を、そこに降り積む雪が花と見紛うまで美しい、として亭主への感謝を伝え、挨拶としている。

同じく『東国紀行』の北条氏康邸の場面でも、

太守より館の花いまだ盛りなれば、明夕参上すべきよし御内議あり。君卓のかざられ、庭籠の鳥、数々の面白さ、遣り水のかけひ雨に紛はず。水上は箱根の水海よりなど聞き侍りて

驚くばかりなり。例の発句、又当座、

花の色も鳥の音おしむ夕哉

ただ今の景気成べし。この発句にて一折独吟にすべきよし、しきりの御事にて、然ば御脇をなど申侍ば、作者にとて、

霞にもるるこすの外の山

今日は二月廿五日、北野御神事、右京兆一日千句万代不休の吉日なれば、御稽古のはじめには尤珍重の由、申なして退出。その館に咲く花の美しさ、庭籠に飼われた鳥（の音）の素晴らしさ、春の夕べ、というその場の素材を発句内に詠み込み、氏康への挨拶としている。その時、その場の景を詠んだ発句に、さらに氏康の代作として脇句「霞にもるる」を付け、ちょうど本日二月二十五日は連歌の神である天神の縁日であり、細川京兆家の一日千句の例もある吉日であるため、連歌の御稽古を始めるには最も結構な日ですよ、と伝えている。

この発句から始まる宗牧の連歌はこの後独吟で百韻全て詠まれ、残されている。満尾の後には氏康に贈られたものと思われる。[15]

発句（とその後に続く連歌）では、このように亭主への挨拶としてその当地・当座のものが詠み込まれ、発句作者の感謝や祝意を伝える役割を果たしている。これらは、座から離れて発句単体でも詞書・自注や紀行文での説明によってその意図が伝わるものもある。

## 三、法楽の表現―目的に合わせた素材を詠む

本節では、前節の当地・当座の景物を詠む発句とは異なる、法楽という目的を持った連歌の発句の表現について見ていく。

はじめに宗祇・宗長・肖柏によって張行された『水無瀬三吟百韻』[16]の発句・脇句を挙げる。

雪ながら山本霞む夕べかな　宗祇

行く水遠く梅匂ふ里　肖柏

この百韻は、長享二（一四八八）年正月二十二日、後鳥羽院の月忌日に行われ、水無瀬にある後鳥羽院の廟に奉納されたことが知られる。発句の表現は後鳥羽院の「見渡せば山本霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ」（新古今和歌集・春上・三六）の本歌取りとなっている。脇句は、発句から水無瀬川を連想し、その「行く水」が梅の匂う里へと遥かに流れる様子を付けている。言葉の縁としては、「水無瀬川ありて行く水なくばこそつひに我身をたえぬと思はめ」（古今和歌集・恋五・七九三・読人不知）を契機とするものかと見える。発句・脇句で「水無瀬」への法楽の意識を共有して表現し、百韻を始めている。

同様の例に、明応四（一四九五）年正月六日に、連歌の准勅撰集『新撰菟玖波集』の成就を祈念して詠まれた『新撰菟玖波祈念百韻』[17]がある。発句・脇句に次のようにある。

あさ霞おほふやめぐみ菟玖波山　宗祇

新桑まゆをひらく青柳　実隆

宗祇の草庵である種玉庵で行われたので「菟玖波山」は張行の場ではない。『日本書紀』に見える酒折宮での日本武尊と秉燭者との唱和（「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる／日日並べて夜には九夜日には十日を」）から連歌のことを「筑波の道」と称すること、先行する連歌の准勅撰集『菟玖波集』のこと、勅撰和歌集である『古今和歌集』の仮名序「ひろき御恵みの蔭、筑波山の麓よりも繁くおはしまして」や「筑波嶺のこのもかのもに影はあれど君がみかげに増す影はなし」（東歌・一〇九五）が想起される発句である。

事前に宗祇はこの発句を三条西実隆に見せ、連歌会には一座していないが脇句を実隆が詠んでいる。脇句では、「筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着欲しも」（万葉集・巻一四・東歌・三三五〇）を媒介として「新桑まゆ」を導き、「青柳の眉を開く」という表現を重ね、発句に詠む「菟玖波山」に託した祈願を受けている。

この『水無瀬三吟百韻』・『新撰菟玖波祈念百韻』の発句・脇句では、座の目的に合わせた本歌や歌枕、句材が選択されていた。一座を主導する宗祇が共に発句を詠んでおり、脇句と合わせて見ても単純な儀礼的やりとりではなく、百韻の目的とする法楽・祈願に向けて連歌の方向性・座の人々の意識を定めるという役割を果たしている。

特定の本歌に拠らない場合も、同様に法楽の目的に合わせて句材を選択している。享禄五（一五三二）年正月張行の『聴雪宗牧両吟住吉法楽百韻』[18]の発句・脇句を挙げる。

春の色染め出す海のみどり哉　　雪
波より霞む雪の遠山　　宗牧

三条西実隆（聴雪）の発句では、法楽の対象である住吉を想起し、その住吉の海が春らしく青々と美しい様子を詠む。宗牧の脇句では、その浦の波から霞みつつ遠くの方に見える雪残る山までの景色を詠み、発句に応じている。住吉社への法楽のためのものとして宗牧が実隆に発句を依頼し、その後も実隆邸を訪ね、複数日をかけて二人で詠み上げられた百韻であることが『実隆公記』・実隆の家集『再昌草』より知られる。

このように発句・脇句にその連歌の目的に応じた内容、例えば法楽先の景等を詠むことにより、その連歌全体・連衆全体を法楽先の神と結びつける働きをしている。第三句以降にその神に関する事柄が詠み込まれなくとも、神への意識を表現した発句から始まっているという枠組みが、その連歌全体の法楽という目的を保証するものとなるのである。

発句に祈願の内容を具体的に詠み込む例も見られる。『三島千句』[19]は、宗祇が文明三（一四七一）年、古今伝受の途中に東常縁の子の病気平癒のために発句を詠み、その後三日で完成させた独吟千句である。その第一百韻の発句は、「なべて世の風を治めよ神の春」と、三島の神の力による世の安定を願う発句として構成しつつ、「風を治めよ」と病気平癒の祈念を込めている。

ここまで、詠作事情が分かっている百韻・千句の例を見てきた。句の表現が法楽という目的と密接に関わっていることが見て取れ

た。このような表現の在り方は、発句（・脇句）が法楽においては神への意識を持って詠まれており、「挨拶」として機能することを示している。法楽としては完成した作品を奉納することが目指されるが、その姿勢は発句の段階から既に明確に意識され、句の中にも表現されているのである。

## 四、挙句の表現―祝意の方向性

二・三節では、座の目的や状況に合わせて発句（・脇句）に詠まれる句材・表現が選択されていること、それらがそれぞれ挨拶性（他者への意識の方向性）を持つことを確認した。本節では、連歌の最終句である挙句についても、その表現を見ていきたい。

挙句は、祝意をもって百韻を巻き上げるのが基本とされるが、その祝意が具体的にはどのような表現で表されるかを確認する。

至徳二（一三八五）年十月十八日に石山寺にて張行された『石山百韻』[20]では、九九番句と挙句で次のように春の情景が詠まれる。

横雲をそのまま花に明けなして　良基
又とちぎれば此の山の春　右大弁

張行は十月なので当座の景色とは重ならないが、「此の山」として石山寺を最後に詠むことで、当地の春を想起させている。

『応永三十年熱田法楽百韻』[21]の九八番句から挙句には、

春いくかへりたえぬ祝言　建照
あら玉の年又としの豊かにて　宥任
大宮司すゑぞひさしき　仲昌

とある。この百韻は、応永三十（一四二三）年十一月十三日に、熱田神宮の社官・寺僧を中心として行われたもので、熱田神宮への法楽であることは明らかである。挙句に詠まれる「大宮司」は神職の長であり、具体的な人物を連衆が想起することもできるが（仲昌からの挨拶）、やはりここはそれを包含する熱田神宮全体への祝意を挙句で連衆全員に共有し、神への法楽とした、と見る。

前節で見た宗祇独吟の『三島千句』の最後（第十百韻の後の追加・二二番句（最終句））は、「仰ぎみしまの朱の玉垣」という句で満尾している。「仰ぎ見（る）」を掛詞にして尊崇の意とし、三島社の玉垣を詠み込んでいる。

祝意を詠むという内容的制約があり（花の句が挙句近くに詠まれて春季を詠むことを要請される場合もあり）、挙句の表現は、のどかな春の形象、治世、言の葉の道等、画一的なものとなってしまうことがある。その中で注目されるのが千句の中の挙句に見られる「家々の風」という表現である。

「仰げ木高き家々の風」（初瀬千句・第一百韻・挙句・専順）、「聞けば治まる家々の風」（葉守千句・第三百韻・挙句・恵林）、「誉れあるこそ家々の風」（高俊興行花千句・第二百韻・挙句・守世）のように詠まれている。[22]

家ごとに多様な家風があり、その多くの家々がそれぞれ繁栄する、というのは祝意の在り方として特徴的である。連歌に参加している人々がそれぞれの家を想起することもできるようにしつつ、範囲を限定しない普く行き渡る祝言としたものと見える。

ここまで、挙句に見られる祝意の表現を見てきた。連歌では前句からの連想によって句を連ねていくため、その大部分は連歌を詠んでいる人々の現実・現在の状況とは関わりのない虚構の内容である。その連歌内の虚構の世界と連歌の場の接続において、挙句では発句と同様、歌枕や場に関連する詞、連歌会の目的に合致する素材、連衆に関係する素材を詠み込むことが有効に機能していた。連歌の完成に向けて連歌の場・目的へと意識を戻し、当地・当座・連衆の人々・法楽の対象を言祝いでいる。挙句は百韻を総括するものとして、座全体への挨拶、祝言となっている、ということができよう。

## 五、平句に見える「挨拶」

先述したように、連歌の発句・脇句・挙句を除く普通の句、平句では、基本的に連衆とは直接関わりのない内容の句が詠まれる。連衆は、前の句から連想されるものを句に詠み、別の人がまたそこから連想されるものを次の句に詠み、ということを繰り返していく。つまり発句や挙句で見た、亭主（主催者）を称揚するような挨拶句や、当座の景の句ばかりが詠まれるということはなく、和歌的世界観に立脚した虚構性の高い句が繋げられていく。

しかし、句作者の意識が全く反映されないということはない。その意識の方向性と、それを反映した表現について見ていきたい。

まず、連歌の場（当座）に関係する名所や景物が詠まれる例を挙げる。『因幡千句[23]』の第十百韻・五四から五八番句には、

専順　変はらぬ色の鶴の毛衣
承世　席田や又この比とかへす日に
青陽　雲ぞ因幡の山に霞める
専順　今年なを国の治まる春は来て
慶珍　民も豊かにながくつかへよ

とある。文明七（一四七五）年十一月二十六日から美濃国因幡で張行された千句で、連歌の場である美濃の歌枕や、関連する素材を千句の中で何度も詠み込んでいる点に注目される。

この引用した部分でも、和歌に「君が代は幾万代か重ぬべき伊津貫川の鶴の毛衣」（金葉和歌集・賀・三二三・藤原道経）と美濃国の歌枕である伊津貫川と共に詠まれる「鶴の毛衣」、催馬楽『席田（むしろだ）』に「席田の 席田の 伊津貫川にや 住む鶴の 住む鶴の 千歳をかねてぞ遊びあへる 千歳をかねてぞ遊びあへる」と詠まれる「席田」、美濃の「因幡の山」を詠み連ねている。

専順は応仁の乱後、戦乱を避けて美濃国に下り、文明八年三月に没するまで斎藤妙椿の庇護のもと過ごしたことが知られる。「国の治まる春」には、そのような戦乱への意識もあろうが、ここでは前の句の流れを受けて特に当地、美濃国の平和を詠み、次句もその祝意を継承している。連歌の場と関連するものが詠み込まれ、その場自体を言祝ぐように進行している。句の作者を見ても、専順ひとりの手柄ではなく、連衆が共同で美濃国に関連する句材を詠んでいることが分かる。為政者の徳を讃え、その恵みがあまねく世にもたらされる、とするのは連歌に限らず賀の歌等にもよ

く見られる構図だが、当地の名所・歌枕、それに関連する素材を詠み込んで美濃国を言祝ぎ、それと同様の効果を発揮させている。

このように挙句だけではなく、平句でも当座の人々の心が一体となるような祝意を持った表現が見られた。歌枕の例を見たが、連歌の中に見える単なる「山」や「川」であっても、当座では当地の山・川を想起して連衆が興趣を感じる、ということがあった可能性はある。そのような当座性・そこから生じる挨拶性は、連歌というものの在り方を考える上で看過できないものである。

類似の構図としては、先に発句・挙句について見たように法楽連歌でその神に関連する素材を詠むということが挙げられる。句には「神」とだけ詠まれていても、法楽連歌で特定の神を指したものならば当座では当然理解されただろうし、「梅」と天神・「松」と住吉の結びつきなどは言うまでもないだろう。

しかしこれを突き詰めて、例えば追善の連歌で死者に関わりのある素材を平句に詠み込む（生前の様子を知っている連衆ばかりが集まっているので共通の知識・理解がある）などということになると、当座以外では同時代の人でもその連歌で詠まれた素材の連想の基盤は把握できないということになる。平句にもそのような当座で意味を持つ表現が存在したということは言えようが、それを完成した連歌の中から座に加わっていない人が見つけるのは至難の業である。

これは、句に詠まれた心情表現に、句作者の心情がどのくらい含まれるものか、という問題にも繋がる。題詠の和歌と同様、自身の心情の吐露を連歌の句で行うことは基本的にない。しかし、次のような句は、述懐句に句作者自身の述懐も乗せたように見える。『湯山三吟百韻』[24]の五一・五二番句を挙げる。

和歌の浦や磯がくれつつ迷ふ身に　　宗祇
満ちくる潮や人慕ふらん　　肖柏

宗祇の詠む、和歌の浦で磯隠れしながら迷っている、という句は、宗祇が和歌の道に迷う我が身の述懐を詠んだもののように見える。これに肖柏は、満ち来る潮のように人が慕うのでしょう、と付けて、宗祇の述懐への応答としている。このような心遣いも一種の「挨拶」と言えるだろう。

同じく述懐句を取り成した例として、『牡丹花宗碩両吟百韻』[25]の六七から六九番句を挙げる。

のどけきも身は入相の鐘の声　　花
ひとり涙を落とす山里　　同
ならふらん嶺越す風も旅枕　　碩

山里で独り涙を流している、という肖柏（牡丹花）の述懐句を、宗碩は旅の句に転換させている。六七・六八番句の、山里で感じる老いと孤独を詠む付合は、当時七十歳の肖柏自身の心情を投影したものとも見えるが、三十歳近く若い宗碩が、肖柏の述懐について直接慰撫するような句を付けるのではなく、風を寄り添わせ、旅中の別の主体が旅のつらさを思う句へと転換させている点が六九番句の優れた付様に見える。このような取り成しも、句を付けていく上での眼目の一つである。

連歌で自身のことを句に詠むことは原則しないと書いたが、禁止されているわけではない。句の作者と句の内容が結びついた時には、その句に次にどのように句を付けるかが問われる。述懐句では、句作者の年齢やその当時の状況を傍証として、自身の述懐も重ねて表現したものだ、と言うことができる場合もあるが、それ以外の題材については、各連衆の心情や経験、知識にどのように基づいたものか分からないことが多い。そのような個別の事情やそれを受けた表現について、句を見てそこから窺い知るのは困難である。ただ、連歌が詠まれる場では、そのような自身への内省、他者への配慮も絶えず行われていたのであろう。

究極的には、他の連衆の句に付句することそれ自体が、座における挨拶性を持つ。自身の句をうまく付ける、ということはもちろん当座で価値を持つが、前句を取り成す際には前に句を詠んだ作者への心遣い、挨拶が必須であり、また自身が詠んだ句を他者が予期しない方向に転換させて句を付けた、というのも意義・興趣を感じる瞬間であろう。そのような交歓の繰り返しにより、連歌は完成していくのである。

## おわりに

本稿では、連歌の中に見られる挨拶性を持つ表現について見てきた。様々な要素によって連歌の句は詠まれ、それに次の句が付けられていくが、その重要な要素の一つとして「挨拶」が挙げられる。連歌内の時空と連歌が行われている現実世界は完全に切り離せるものではなく、作品のそこここに、その片鱗を覗かせる。

連歌の規定として取り上げられることの多い「発句に「挨拶」を詠む」ということは、単なる儀礼的な振る舞いではなく、それぞれの場において大きな意味を持つものであり、それを基調として連歌全体を満尾まで推し進めていく。一句一句の句境は変化と転換を中心とし、座全体が共同で積み重ねていく時空は交感を常に必要とする。その中で、連歌の完成に向けた原動力の一つが、ここで「挨拶」として見てきたような、発句から挙句に至る間に散見される様々な句の働き（前句への応答的な付合、当座に関わる素材の機能、心情の吐露へのいたわり）なのだと言えよう。連歌を完成させる、ということが、その座の人々の結びつきや、神仏との結びつきを保証することに直結するが、その過程では、一句一句の中に句作者の工夫や心遣いが込められているのである。

注

※和歌の引用は新編国歌大観（古典ライブラリー）に拠る。引用にあたり表記を改めた箇所がある。他の引用についても同様である。

（1）「連歌の性格（上）」（『中世文学論研究』（塙書房、一九六九年）第四章第一節所収、初出：『語文』五輯、一九五二年四月）。

（2）「芸能性と文芸性と」（『島津忠夫著作集』第二巻 連歌（和泉書院、二〇〇三年）第一章、初出：「芸能史研究」七号、一九六四年十月）。

（3）「連歌の注釈ということ」（『島津忠夫著作集』第二巻 連歌（和泉書院、二〇〇三年）第六章）。

（4）普及版（角川学芸出版、二〇〇八年）。草間時彦執筆。

(5) 『俳句とは何か』(角川ソフィア文庫、KADOKAWA、二〇〇〇年)所収(『俳句芸術』一輯、桃蹊書房、一九四八年七月)。
(6) 日本古典文学全集『連歌論集 能楽論集 俳論集』(伊地知鐵男・表章・栗山理一校注、小学館、一九七三年)に拠る。
(7) 「連歌発句で当季を詠むということ—十二月題という当座性—」(『連歌という文芸とその周辺—連歌・俳諧・和歌論—』(新典社、二〇一八年)第三章・二)。
(8) 「発句論—17世紀前半までの発句の変遷について—」(『聖徳大学研究紀要』三一号、二〇二〇年)。
(9) 発句を客人が、脇句を亭主が詠むという連歌会での作法を指す。それぞれの句を詠む際の心構えとして連歌論等で用いられる場合もある。「客発句亭主脇」とも。
(10) 「連歌と神祇」(『連歌文芸論』(笠間書院、二〇一五年)第Ⅰ部第六章所収、初出:『国文学 解釈と鑑賞』七五巻一二号、二〇一〇年一二月)。
(11) 金子金治郎編『連歌古注釈集』(角川書店、一九七九年)に拠る。『愚句老葉』では宗祇の自注に宗長の注釈も併記しているが割愛した。
(12) 人物比定については、金子金治郎『新撰菟玖波集の研究』(風間書房、一九六九年)、廣木一人『連歌師という旅人 宗祇越後府中への旅』(三弥井書店、二〇一二年)参照。また、「咲く藤に」句については、橋本雄「宗祇旧知の入明僧「吉祥院」とは誰か」(芳澤元編『室町文化の座標軸 遣明船時代の列島と文事』(勉誠出版、二〇二一年)注34に言及がある。
(13) 新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』(伊藤敬他校注、小学館、一九九四年)に拠る。
(14) 『群書類従』第十八輯(続群書類従完成会、一九二八年)に拠る。
(15) 当該百韻の詠作事情については、拙稿「連歌作品と古注釈の成立について—天文年間の宗牧注を起点として—」(『明星大学研究紀要人文学部・日本文化学科』二八号、二〇二〇年三月)で論じたことがある。
(16) 新潮日本古典集成『連歌集』(島津忠夫校注、新潮社、一九七九年)に拠る。
(17) 注16前掲書に拠る。
(18) 桂宮本叢書第十八巻『連歌一』(養徳社、一九五五年)に拠る。宗牧の注釈は割愛した。詠作事情については注15前掲論文参照。
(19) 金子金治郎『連歌古注釈の研究』(角川書店、一九七四年)に拠る。
(20) 注16前掲書に拠る。
(21) 注16前掲書に拠る。
(22) 『連歌大観』第四巻(廣木一人・松本麻子編、古典ライブラリー、二〇二三年)に拠る。「家々」と「家の風」を合わせた表現で、正徹の『草根集』に「家家の風はあれども君が代の塵治まれる時ぞかしこき」とある以外、先行する和歌にはほとんど例がない。「いや栄へゆく家々の客(天理図書館本傍注:風)」(熊野千句・第六百韻・挙句・心敬)も内容から考えると「風」が適当か。
(23) 注22前掲書に拠る。当該部分について、稿者執筆の同書解題でも取り上げている。
(24) 注16前掲書に拠る。
(25) 注18前掲書に拠る。

付記
本稿は二〇二四年一月六日開催の大阪大学国語国文学会での講演に基づく。席上及び事後にご教示いただいた諸氏に深謝申し上げる。

(あさい・みほ 本学准教授)